

人生に舞う



□コンビニ(朝)

缶コーヒーとパンを持ってレジに並ぶ若い男。

店員はレジ袋を掴む。

レジ袋「お！ 来たな。じゃあお前たち、行ってくるぜ！」

残されたレジ袋たちに声をかけるレジ袋。

レジ袋のみんな「おー！ 立派にやれよー！」

若い男は店員から商品の入ったレジ袋を受け取る。

店員の適当な挨拶。

自動ドアの開く音。

レジ袋「菓子パンとコーヒーだけか。楽な仕事だぜ」

若い男は外でパンを食べる。

レジ袋「なんだなんだあ？ もう食べちゃうのか」

すぐにパンを食べ終える若い男。

缶コーヒーを取り出す。

レジ袋「も、もうお役御免か……つてうおとおおつ?!」

レジ袋を雑に丸める若い男。

ゴミ箱へ投げるが、大きく外して地面に落ちてしまう。

レジ袋「雑に扱いやがつて。資源は大事にしろ！ 全く。あれ？ おい！

どこ行くんだ！ ちゃんと俺をゴミ箱に……」

小さくなつていく若い男の背中を見つめるレジ袋。

レジ袋「おいおいまじかよ……」

徐々に体が広がっていくレジ袋。

レジ袋「だ、誰か……」

自動ドアの開く音。

店員が箒を持って出てくる。

レジ袋は日に照らされて輝き始める。

レジ袋「た、助けがきた！ おーい！ 俺はここだよ！ ゴミ箱に入れてくれるだけで良いんだ！ そうすりゃあ業者が来て、俺を再利用してくれるはずなんだ……」

そよ風に揺られて、レジ袋からコンクリートの擦れる音。

レジ袋に気付いて歩き出す店員。

レジ袋「うおー！ いいぞおー！」

風の助けもあり、興奮して体が浮き上がるレジ袋。

レジ袋「え、ちよ、ま、わー！」

突風により高々と舞い上がるレジ袋。

レジ袋「くそ……この風が、この風がなければー！」

レジ袋があつた場所より手前に落ちていた百円玉を拾う店員。

□小学校（校庭）

ふわふわと校庭の中心へ着陸するレジ袋。

プールから子供たちの声。

校庭には誰もいない。

レジ袋「こ、こは……」

ふらふらと校舎の窓から真つ白な紙ヒコーキ。

レジ袋「全く、あの男のせいで酷い目に遭っちまった。とりあえず誰かに拾ってもらわないことには……」

角度が変わり、急降下する紙ヒコーキ。

紙ヒコーキ「あぶなー……いーい！」

レジ袋「うん？ うわあぁー！」

上空から落ちてきた紙ヒコーキ。

地面を滑り、レジ袋にぶつかる。

レジ袋「急になにすんだ！ ……はっ！」

紙ヒコーキ「ご、ごめんなさい……怪我はありませんか？」

懐かしい紙ヒコーキの姿に、心奪われるレジ袋。

レジ袋「お、お前こそ、大丈夫かよ？」

紙ヒコーキ「私は平気よ。それに、あの子が必ず迎えに来てくれるもの」

レジ袋「あの子？」

紙ヒコーキ「ええ。折り紙だった私に手を加えて、この姿にしてくれた

男の子よ」

レジ袋「それは本当か!？」

紙ヒコーキ「ど、どうしたの？」

レジ袋「ああ、実は——」

* * *

レジ袋の回想。

レジ袋たちが見送る姿。

自分を捨てた若い男の後ろ姿。

風によって飛ばされる自分の姿。

回想終わり。

* * *

レジ袋「ということなんだ」

紙ヒコーキ「そんなことがあったなんて、にわかには信じられないわね。でも大丈夫! あの子ならちゃんとあなたも拾ってくれるわ! あんなに純粋な人間を、私は見たことないもの!」

レジ袋「そ、そうか」

紙ヒコーキが無邪気に話す姿を見て、体にしわが増えるレジ袋。

紙ヒコーキ「そうよ! それに……きゃあ!」

レジ袋「危ない!」

風が吹き、校庭の砂が二人を襲う。

紙ヒコーキに引っかかり、飛ばされずに済むレジ袋。
紙ヒコーキを砂から守る形となった。

紙ヒコーキ「あり……がどう」

レジ袋「いや、これぐらい……」

紙ヒコーキ「ふふ。あなたつてとても素敵なレジ袋ね」

レジ袋「あ、ありがと、よ」

レジ袋のしわが無くなる。

紙ヒコーキ「私たち、とても良い友達になれそうね」

レジ袋「友達……そうだな」

校舎からチャイムが鳴る。

紙ヒコーキ「ん？ ……あ、授業が終わったみたいだわ！ きつとあの子が迎えに来てくれる！ 私を探しにここまで！」

レジ袋「(モノ) 良いんだ、これで俺も元通り、本来送るはずだった人

生を送れるんだから……」

紙ヒコーキ「あ、あの子よ！」

校舎から一人を筆頭に五人の少年たちが走る姿。

レジ袋「なんて無垢そうな少年だ……」

紙ヒコーキ「ふふ。はやくはやくー！ 私ほここよー！」

レジ袋と紙ヒコーキに迫る少年たち。

緩やかに風が吹く。

レジ袋は紙ヒコーキから離れる。

レジ袋「紙ヒコーキちゃん！」

勢いよく通り過ぎ、無邪気にサッカーゴールへ向かう少年たち。

紙ヒコーキ「ふぎやあっ！」

レジ袋「あああ！」

前を走っていた少年に踏みつけられ、くしゃくしゃになってしまっ

た紙ヒコーキ。

紙ヒコーキ「そ、そんな、どうして……」

レジ袋「紙ヒコーキちゃん！」

風は止め、紙ヒコーキに近づくことの出来ないレジ袋。

紙ヒコーキ「ああ、はあ、はあ、う……」

レジ袋「人間は……俺たちを……救ってはくれないのか……？」

少年たちのはしゃぐ姿。

レジ袋「あいつら……」

体に空気が入りばんに膨れるレジ袋。

紙ヒコーキ「だめ……よ……」

レジ袋「え……？」

紙ヒコーキ「恨んではいけないわ……あの子も……人間も……」

レジ袋「本当に人間を信じて良いのか！？ 君は裏切られたんだぞ！

僕と同じように！」

少年たちの遊ぶ声。

校舎から子供たちがどンドン出てくる。

紙ヒコーキ「私が、空を飛べたのも、あなたに逢えたのも、あの子の

……おかげよ……？」

レジ袋「そんなの……」

体の空気が抜けるレジ袋。

紙ヒコーキ「きつと、生きていけば、良いことは……必ずある。私はずう、きつと、このまま朽ちていくんだらうけど、あなたは私の分も、生きて、幸せになつて……」

突風が吹く。

レジ袋「くそ……なんで……う、うわあああああああ！ 紙ヒコーキちゃあああああんー！！」

高々と舞い上がるレジ袋。

紙ヒコーキは地を転がり、校庭の砂が覆い被さる。

「紙ヒコーキ」どうか……幸せ……に……」

□アパート

自宅のアパートに帰ってくる若い男。

ドアが閉まり鍵を閉める音。

「ティッシュで鼻をかみ、ゴミ箱へ捨てようとするが袋の中はいつぱいだった。

手頃な袋が見つからず頭を掻く若い男。

□上空五十メートル

小学校から離れ、空を不細工に舞うレジ袋。

レジ袋「紙ヒコーキ、ちゃん……」

* * *

レジ袋の回想

紙ヒコーキのはにかむ姿。

紙ヒコーキがくしゃくしゃになった姿。

回想終わり。

* * *

レジ袋「(モノ) 紙ヒコーキちゃんにはああ言われたけど、自信なんて、ない……」

風船「おーいー!」

レジ袋の下から赤い風船。

レジ袋「(モノ) だって人間は俺らのことを……」

レジ袋と同じ高さまで上がってきた風船。

風船「おーいつてば！」

レジ袋「うわ！　なんだ、誰だお前」

風船と距離を置くレジ袋。

風船「はは。驚かせてごめんね。僕は風船。人間が誤って僕に繋がれている紐を離れたおかげで、今こうして空を飛んでいるんだ」

レジ袋に近づき、周りをゆらゆらと回る風船。

レジ袋「お前も人間と離れたのか……？」

風船「本来は子供に配られる予定だったんだけどね。はは」

レジ袋の横で動きが止まる風船。

レジ袋「それにしても楽しそうだな」

風船「当然さ！　僕は今こうして自由になったことを奇跡だと喜んでい
る！　夢にまで見た大空だ！」

上昇して太陽と重なる風船。

レジ袋「なっ……（モノ）こいつ、なんなんだ？　なんでこんなに楽し

そうなんだ。もう元の場所には戻れないんだぞ？」

風船「君はおそらく、違うんだろう？」

レジ袋「あ、当たり前だ！　僕はレジ袋だぞ！　こんな空にいて、なん
の役にも立たないじゃないか！」

風船の隣まで上昇するレジ袋。

風船「人間の役に、立ちたいのか……」

レジ袋「当たり前だ！」

風船「でも、君は君として扱われなかったんだね」

レジ袋「（モノ）こいつ、なんなんだよ」

風船から離れようとするレジ袋。

風船「だけど、それはそれで良いんじゃない？」

レジ袋「なんだって？」

どんどん上昇する風船を追いかけるレジ袋。

風船「君は周りをちゃんと見たかい？ ほら、下にいたら一生見ることの出来ない景色だ！ 他のレジ袋には一生見ることが出来ない風景だ！ 誰に縛られることもない、自分だけの世界なんだ！」

青く澄んだ大空。

風で流された先には広大な海が広がっている。

レジ袋と風船から離れた所では鳥の群れが列を成して飛んでいる。

レジ袋「これは……」

風船「今は、君と僕だけの世界だよ」

レジ袋「風船……」

風船「これからもよろしくね」

レジ袋「ふ、ふん。ばかやろうが。俺は別に自分の生き方を曲げるつもりはねーよ」

握手をするように軽く触れ合う風船とレジ袋。

風船「はは。君とは良い友達になれそうだね」

レジ袋「友達？」

風船「ああ、生まれた環境が違えど、僕らはもう、とも……ごほつごほあ！」

レジ袋「だ、大丈夫か風船！」

ばんばんに膨れ上がった風船。

風船に寄り添うレジ袋。

風船「だ、大丈夫だ。思ったより早い……な……」

レジ袋「おい！ しっかりしろ！ これからだろ！ これから二人で、色んな景色を堪能するんだろ！」

風船「はは。やっぱり君は、良いやつだな。あり……がどう……さい……ごに……君と……逢えて……幸せ……」

風船は光を浴びて鮮やかな光沢を魅せる。

突風の音に紛れて風船が割れる音。

レジ袋「ふうせえええええーんっ！！」

勢いよく海の方へ飛ばされるレジ袋。

□コンビニ(昼)

自動ドアが開き、店員の声。

コンビニへ弁当を買いに来た若い男。

一つのレジ袋と一緒に弁当を受け取る。

店員の適当な挨拶と自動ドアの音。

外では開封せず、コンビニを後にする若い男。

□上空五十メートル

海の上を漂うレジ袋。

レジ袋「もう、いやだ。これから一体、何を信じていけば……」

太陽を見上げるレジ袋。

レジ袋「まぶしい……うん？」

後方に鳥の群れ。

レジ袋「まさかこっちに、来る……！？」

真っ直ぐレジ袋に向かう鳥の群れ。

レジ袋「に、にげなきゃ」

風の力を借りてスピードを上げるレジ袋。

レジ袋「く、くそ！」

鳥の群れに囲まれるレジ袋。

レジ袋「わあああ！ ど、どっかいけよ！」

風が吹いて上昇するレジ袋。

鳥が鳴きながら一斉にレジ袋をつつきます。

レジ袋「おぞましい！ おぞましい！」

雲行きが怪しくなる。

レジ袋「(モノ)も、もうだめだ、俺は二人の分も生きられない……くそ、ごめん……」

雷による轟音。

レジ袋「うわっ！」

鳥の群れは一斉に退散。

レジ袋「た、たすか……うわあああああああああ」

強烈なスクロールにより海上へ降下するレジ袋。

□海

海に大量の雨粒の跡。

レジ袋が空から落ちてくる。

レジ袋「——あああああああっ！」

海に叩きつけられて海中へ沈むレジ袋。

逃げ惑う魚たち。

しばらくすると雨が止む。

海上に浮かび上がるレジ袋。

レジ袋「ぶはあ！もう、なにがなにやら」

海上をぶかぶかと浮かび漂うレジ袋。

雨を落とした雲が場所を空け、太陽が顔を出す。

日に照らされてレジ袋が光を反射させる。

レジ袋「(モノ)紙ヒコーキちゃん人間を信じろと言う、風船は人間から離れたことを幸運だと言う……」

徐々に陸の方へ流されるレジ袋。

レジ袋「じゃあ俺は……」

太陽に浮かぶ紙ヒコーキと風船の姿。

レジ袋「風船……紙ヒコーキ……ちゃ……ん……」

眠って意識を失うレジ袋。
静かな波が運ぶ先からは浜辺が見えてくる。

□アパート（昼）

自宅に到着するなり弁当を広げる若い男。

テレビからは笑い声。

食べ終わるとレジ袋をゴミ箱にセットする若い男。

□浜辺（夕方）

打ち上げられたレジ袋。

周りにはいくつものクラゲの姿。

離れた所では人間が海水浴を楽しんでいる。

レジ袋「う……こ、ここは……」

意識を取り戻すレジ袋。

クラゲ「気が付いたかね」

隣に打ち上げられていたクラゲがレジ袋へ声をかける。

レジ袋「う、うわ！」

クラゲ「ほっほっほ。元気そうだなによりじゃ」

レジ袋「くそ、動けない！……あれ？襲ってこないのか……？」

体に張り付いた水滴が重く、風が吹いても飛ばされないレジ袋。

クラゲ「襲うじゃって？ワシも動けんのじゃ。安心せい」

レジ袋「は、はあ」

波が二人の手前まで押し寄せては帰って行く。

クラゲ「ああ！惜しい！」

レジ袋「どうしたんです？」

クラゲ「あの波はワシを海へ返す希望なんじゃよ。ワシの生まれた世界じゃ」

レジ袋「希望……世界……」

海の先を見つめるレジ袋。

クラゲ「ワシは絶対、あそこへ帰ってみせるんじゃ」

レジ袋「俺も……」

クラゲ「うん？　そういえばお主……あああああああつ！」

大きなトングとビニール袋を持った複数の人間。

他のクラゲたちを袋に捨てていく。

クラゲ「あ、あんな、恐ろしい、悪魔じゃ！悪魔がきよつたんじゃあ！」

レジ袋「確かに、悪魔かもしれない……」

クラゲ「はやく、はやく波がこないと……」

淡々と他のクラゲたちを袋に捨ててい

く人間たち。

人間たちの後ろから波打ち際を走って

くる少年。

少年の名前を叫びながら走る母親。

レジ袋「な！」

クラゲ「へぶうえあ！」

通りざまに海の方へクラゲを蹴飛ばす

少年。

少年の笑い声と母親の叱咤する声がレ

ジ袋を通過する。

レジ袋「あ」

クラゲ「やった！　海、海じゃ！　帰って

きたんじゃあああつ！」

海へ消えるクラゲ。

夕日が浜辺全体を赤く染める。

キャップの人間が立ち止まり、空を見上げる。

眩しさのあまり、レジ袋を離してしまう。

レジ袋「ぼひゃあ！」

地面へ落ちて体の底に穴が開いてしまうレジ袋。

散らばったクラゲを慌てて集め直すキャップの人間。

遠くから別の人間が新しいビニール袋を持つてくる。

クラゲを集め直すと、そそくさと浜辺を後にするキャップの人間。

風が、千切れたレジ袋を空へ誘う。

音楽が流れる。

エンドロール。

飛ばされながら千切れたレジ袋に表記されるスタッフ名。

太陽に向かって飛んでいく千切れたレジ袋。

END

